西南学院大学　教育・福祉論集　第４巻　第２号　111－133頁　2005年２月

授業における発言の様相―解釈

―― 中学校１年生の社会科を事例に ――

田　代　裕　一

A Study on the Modality of Discussion in the Classroom Process:

Cases of S1 Social Studies Classes in Secondary School

Yuichi Tashiro

Ⅰ．発言表による授業の様相－解釈的研究

本稿は「発言表」を用いて授業の構造的全体像を明らかにし、授業の特徴・問題性を指摘するという、授業の様相－解釈的研究の一環をなすものである。前回まで、本論集において小学校１年生から６年生の授業実践について連続して検討してきたが[1)]、今回からは中学校の授業（社会科）を取り上げる。

発言表とは複雑な授業を言語の観点から「見える」ものにしていくための手立てである[2)]。ここでその作成の手順について簡単に述べておく。発言表は基本的に、発言者名欄及び、発言状況欄からなる。発言状況欄には、授業記録上の全発言の長さを、縦の実線として記入する。本稿では授業記録（雑誌「考える子ども」掲載）での発言記録の二行分（一行…30字程度）を罫線の実線の一単位分にしている。さらに、授業において用いられた重要なコトバを記号化して載せている。表中の発言で重要なものや、注目すべきものは線で囲み、また、発言と発言の関係は矢印などで表した。右の発言内容の欄には、その授業での内容展開や言語的応答関係を示す上で、重要と思われる言葉を抽出して記載している（原文の約４分の１）。発言表の原版はＢ４サイズだが、紙面の都合上、縮小している（今回、事例①は縦56%　横52%、事例②と事例③は縦

56%　横62%）。

本稿で分析事例として取り上げるのは、「社会科の初志をつらぬく会」の夏季全国集会で提案された中学校１年生の社会科の授業実践である。本会の機関誌「考える子ども」に掲載された提案の授業記録（授業記録集が作成された1978年から現在までの中から選択）を用いて検討する。

Ⅱ．授業の分析

分析事例①

○長野県・Ｙ中学校１年　Ｉ先生指導　社会科「関東地方　－首都東京」1987年２月26日　生徒数は42名（授業記録から推測）。　原授業記録は「考える子ども」第30回記念夏季集会特集号　1987年（128頁～143頁）に掲載されている。以下の分節わけ、および分析は筆者による。

○授業の構造と分析（文末の発言表を参照されたい。以下のカッコの中の番号は授業での発言の通し番号だが、原授業記録とは必ずしも一致していない。以下の事例も同様）

・第１分節（１Ｔ）

教師が前時の追究問題を確認し、川崎製鉄が神戸から移って、千葉で製鉄生産を始めた理由の追究の続きを行なうと述べている。前の時間に出た意見として、開発が進んできたから、開発が進んでなかったから、水が必要なので、鉄鉱石を運んでくるのに都合がいいから、神戸に土地がなかったから、海岸だと（公害などの）反対がないから、などが出ていたと確認している。

・第２分節（２清水～25Ｔ）

子どもたちは次々に自分の考えを発表している。千葉付近は開発が遅れていた、交通が便利で土地がある、船の交通が便利、鉄が得やすい、東京に近い、などが出ている。

・第３分節（26小石～35Ｔ）

子どもから水という言葉が出ている。教師は水をどのように活用するのか、確認している。

・第４分節（36晴美～44理美）

鉄鉱石が運びやすい、交通が便利といった意見が多く出ている。

・第5分節（45T～49T）

土地がいい、という意見が出て、教師はどんな意味でいいのか、確認している。

・第6分節（50T～70山本）

貿易がしやすい、勤めている人が便利、鉄鉱石を運びやすい、公害の問題がない、東京に近い、水で鉄鋼石を冷やせる、輸出の時に近い、交通の便がよい、など様々な予想が出ている。

・第7分節（71T～92荒井）

土地を確保できるという発言に対して、教師が意味を確かめている。周りが空いていると工場を広げる場合に役立つ、とその子どもは答えている。

・第8分節（93T～104澄子）

鉄の供給がいい、輸出の時に早い、都市に近い、鉄鉱石を運ぶのに便利、東京が首都なので場所がよい、公害を及ぼさない、など様々な予想が出ている。教師は、東京に近いことの意味や、なぜ他の場所ではだめなのか、といった確認を行なっている。

・第9分節（105T）

教師が、友達の意見を聞いての感想や追究したいことがあったらメモするように指示して、授業を終えている。

○授業の発言状況

教師と生徒の発言回数比はほぼ1対1である。教師は授業の全体を通して多く出て、子どもの発言に丁寧にコメントをしている。時々、何回も確認している。また、比較的長い発言をしている。子どもの発言者数は41名で、クラスの全員が発言していると思えるが、それは教師の指名によって自分の番で発言するというように、「列挙・羅列的」な発言となっている。また1回きりの短い発言が多い。ただ、教師との応答の中で、4回（美奈）、3回（田原・吉田）と発言している者もいる。

第1分節は教師の20単位の長い発言がある。第2分節では、11名の子どもの初回発言がある。複数回、発言している者は1名である。教師は子どもの発言の度に、その内容を確認している。11発言や19発言は3単位で、比較的長い。第3分節では、3名の初回発言がある。小石、湯元は教師と対応して、2回発言している。第4分節も4名の初回発言がある。教師は簡単に確認している。第5分節では、2名の子どもが発言する。教師は3回、発言している。第6分節では、10名の初回発言があり、多くの子どもが発言している。教師の発言には、53発言や61発言など3単位の長いものがある。裕子は3単位の長い発言をしている。第7分節では5名の初回発言がある。田原や吉田は教師と応答して、3回発言している。荒井も2回発言している。第8分節では、7名の初回発言がある。教師との応答の中で、美奈は4回発言している。第9分節は、教師の5単位の長い発言がある。

このように本授業では、主要な話題について、子どもたちが順番に自分の予想を出し、教師がそれに対して丁寧に確認してコメントしている。問題の焦点化や理由・原因の追究は十分になされていないが、子どもたちは多様な考えを十分に出して、内容を確認しているといえる。

○言葉・概念の展開状況

教師が最初から多くの主要な言葉・概念を出しているが、子どもたちからも交通、鉄、公害、輸出などが出ている。主要な言葉を一度に多く含んだ子どもの発言は少ない。

第1分節で教師は、神戸、千葉、開発、東京、水、鉄鉱石、土地、といったように本時の追究課題に関わる言葉を多く出している。第2分節では、子どもから東京が6回、交通が3回、鉄が3回出ている。その他に、開発、土地、神戸、千葉、など様々な言葉が出ている。教師も、開発、東京、神戸、千葉、交通、などをくり返し出している。後半、鉄を2回、用いている。加藤は、一つの発言の中に東京、交通、土地といった言葉を用いている。第3分節では、子どもから水が2回、神戸、鉄が1回用いられている。教師は水を3回用いて、子どもの発言に対応している。ここから教師が水（の用い方）に注目していたことがわかる。第4分節では、子どもから鉄鉱石が3回、交通が3回出ている。理恵は、東京、鉄鉱石、交通などの言葉を一つの発言（40）に含めている。このようにやや焦点化された追究がなされている。こ

こでの鉄鉱石は子どもから出た言葉である。第5分節では、子どもが土地を1回用いているのに対し、教師は3回の発言の全てで用いている。このことから教師が土地の意味を明確にしたかったことがわかる。第6分節では、第2分節と同じように、鉄鉱石、土地、公害、東京、開発、水、鉄、輸出、交通、千葉、など多くの言葉が子どもから出ている。公害、輸出はここで初めて出ている。教師は公害、土地、水、輸出、交通を1回ずつ用いている。山本（70）は、東京、千葉、開発を一つの発言の中で用いている。第7分節では、子どもから出ているのは開発のみ（1回）である。一方、教師は土地を4回、開発を2回用いている。ここでも教師は土地に注目しているといえる。第8分節では、鉄、輸出、鉄鉱石、千葉、東京、土地、公害、といった様々な言葉が子どもから出ている。教師は鉄を3回、東京を2回、千葉、交通を1回用いている。第9分節での教師の発言には主要な言葉は含まれていない。

以上のように、多様な言葉が出ている分節（第2分節、第6分節、第9分節）と、限定的な言葉が出ている分節（第3分節、第4分節、第5分節、第8分節）とがある。また、子どもの発言で用いられた言葉をその都度、教師も用いていることが多い（特に第2分節～第6分節、第8分節の前半など）。さらに、教師が繰り返し用いていた言葉から、教師は特に水、土地に注目して、その意味を明確にしようとしていたといえる。一方、子どもには、主要な言葉を多く含めた発言は少なく（3つの言葉が含まれている発言は3回）、お互いの発言を内容の面で深めていくという活動はあまり見られない。また、子どもから公害、輸出が出ていたが、これらの言葉は社会科の追究内容として重要だと思われる。

分析事例②

○長野県・M中学校1年　C先生指導　社会科「中国、その発展と人々」1992年11月2日　（生徒数は原授業記録には明記されていない。）　原授業記録は「考える子ども」212号　1993年（82頁～95頁）に掲載されている[3)]。

○授業の構造と分析

・第1分節（1T～7洋次朗）

教師が前の時間までに中国を追究して、わかったことを確認している。その内容として、甘藷が世界の80%、テレビの生産が世界1位など、工業・農業が発展して来ていること、その一方で、読み書きができない人が5人に一人といったことが出ている。（なお、この実践は1992年のもので、原授業記録では「文盲」という言葉が使われているが、本稿ではこれを「読み書きができない人」という言葉に変えて述べることにする。）

・第2分節（8T～41昌宏）

教師が本時は、中国ではどうして農村に読み書きのできない人がこんなにも増えてきたのかを追究すると述べている。その理由について、農村では読み書きができなくても生きていける、教育制度がしっかりしてないのでお金がないと学校に行けない、働くともうかるので勉強しない、給料が低いので学校に行けない、一人っ子政策を無視して10%賃金カットになり子どもを学校に入れることができない、といった意見が出ている。

・第3分節（42T～46T）

教師が今までの発言を整理し、5つの立場にまとめている。そして5分間、バスセッションで考えさせたあと、反対の意見があったら、出すようにと勧めている。

・第4分節（47T～59もも子）

農村では親も字を知らないから教えられない、都市でも文字が読めなくても死にはしない、といった意見が出る。その他に、農村でも子どもを一人産めばお金がもらえるからいいという意見が出され、これに対して反論が出ている。

・第5分節（60さやか～73めぐみ）

読み書きの必要性について議論が生じている。読み書きは自分の人生にもプラスになるので、できなくても生きていけるという意見はおかしいと、さやかは述べている。

・第6分節（74理絵～84もも子）

農作物をつくるために（子どもを多く産んで）賃金10%カットされても問題はないのか、が議論されている。もも子はたくさん農作物を作ればたく

さん売れるので問題ないと述べている。

・第7分節（真吾85～102T）

真吾が佳典に、賃金カットされたら農作物をたくさん作らないといけないが、半分しかできなかったらどうするかと質問する。しかし、話題は、学校へ行くことの意味や、都市の人はなぜ農村に帰らないのか、に移っている。最後の方で教師が佳典に、一人っ子政策を無視して産んだ理由について尋ね、真吾の発言に関連させている。教師は疑問や質問したいことを学習カードに書くように指示して授業を終了している。

○授業の発言状況

教師と子どもの発言回数比は1対3．3である。前半では、分節の最初の発言がほとんど教師であるが、後半は子どもの発言が分節を構成する契機となっている（第5分節、第6分節、第7分節）。子どもどうしの質問や応答も初期の段階から生じている。昌宏が10回、もも子と洋次朗が9回と、かなり発言の多い子どもがいる。第2分節、第5分節、第7分節（前半）では教師の発言は少ない。

第1分節の初回発言者は3名である。教師は3回出て比較的長い発言をしている。第2分節の初回発言者は9名で、3単位以上の長い発言も4回ある。洋次朗と昌宏は7回発言している。洋次朗と昌宏の間で質問―応答が生じている。昌宏と光志も質問－応答をしている。もも子は4単位の長い発言をしている。教師は最初に5単位の長い発言をしているが、その後はあまり発言していない。第3分節は、教師が7単位の長い発言をして今までの子どもの発言内容を整理している。第4分節で教師は短い発言を5回している。もも子は真由美への質問として、3単位以上の長い発言を3回している。初回発言者は2名である。第5分節では初回発言者は4名であるが、それぞれ3単位以上の発言をしている。正志は3回発言している。教師は短い発言を3回している。第6分節では真由美がもも子に質問して、両者の間で議論が起きている。ここでは真由美が2回、もも子が5回発言している。教師は3回発言して、もも子の発言の内容を確認している。第7分節の初回発言は1名である。ここでは、今まで発言してきた子どもの単発的な発言が多い。昌宏と

洋次朗との間では問答が生じている。佳典は教師との対応の中で、3回発言している。教師は後半、4回発言している。

以上のように、本授業では子どもどうしで質問―応答が多く起きている。第2分節で3単位以上の長い発言が多く出ており、初期の段階から内容面での追究がなされている。一方、教師は子どもの発言内容を確認して、整理していることが多く、比較的、短い発言が多い。また、子どもに個別に対応するよりも、節目節目で対処しているといえる。

○言葉・概念の展開状況

この授業では、第1分節（前回までの復習をする箇所）で教師がいくつかの主要な言葉を出しているが、その後、子どもたちも重要な言葉を多く出している。子どもの発言の中には、主要な言葉を多く含むもの（4個以上）が9回もあり、内容面での関連づけがよくなされていることがわかる。また、都市、農村は全体的に出ており、本授業では両者の比較が主な活動であったといえる。

第1分節では読み書きのできない人が1回使われている。第2分節では、教師が読み書きのできない人、都市、農村を用いている。子どもたちはそれに加えて、教育、学校、生産責任制、お金、自由市場、一人っ子政策、賃金カットを出している。佳典20発言は、一人っ子政策、賃金カット、お金、農村、都市、といった多くの言葉を用いている。後半も、都市、農村、お金、学校が多く出て、都市と農村を比較しながら教育や経済の追究がなされたことがわかる。第3分節では、教師がまとめの発言の中で、学校、都市、お金、読み書き、教育を用いている。さらに、生産責任制、農村、一人っ子政策、賃金カットを用いている。第4分節では、子どもたちから、都市、お金が多く出ている。樹聖48発言は農村、都市、学校、お金を用いている。真由美53発言も、農村、学校、一人っ子政策、お金を用いている。この真由美の発言に対して、もも子は、学校、お金、一人っ子政策、自由市場を用いて反論している。教師も一人っ子政策を用いている。このように、この分節の後半は一人っ子政策が話題の中心になっているといえる。第5分節では、さやかが農村、学校、都市の他に、読み書きを出している。この読み書きは、他

にも昌宏、正史、めぐみも用いており、この言葉が新たな話題になっているといえる。第6分節では、理絵から読み書きのできない人が出ている。もも子も読み書きのできない人を2回用いている。これは、第3分節以降は出ていなかった言葉である。ただ、その後、真由美が賃金カットを出し、話題は賃金カットや自由市場に移っている。第7分節は、子どもたちからお金が6回出ている。また前半は、学校がよく出ているが、後半は一人っ子政策が教師と佳典から2回ずつ出ている。

このように本授業は、子どもから主要な言葉が出され、質問―応答によって検討されている。内容面では読み書きのできない人をめぐって教育と経済の観点から追究されているが、後半では特に、一人っ子政策の是非が問われていた。ただ、子どもたちの立場が5つにわけられていることで、授業内容がやや複雑になり、議論が細かい面においてなされている。

分析事例③

○茨城県・H中学校1年　K先生指導　社会科「加倉井砂山と日新塾」　1999年1月18日　生徒数28名　原授業記録は「考える子ども」　2 5 1号　1999年（78頁～91頁）に掲載されている。

○授業の構造と分析

・第1分節（1T～8野田）

加倉井砂山について調べた感想を4人が発表している。思いやりの教育をした、尊敬できる人、怒らないことに感心した、個性を生かす教育を行った、といった、砂山の人柄や教育の特徴が述べられている。

・第2分節（9T～19 野田）

砂山の優しさをどう思うか、と教師が尋ねている。みんなから好かれていい、まねできない、干した柿を食べた弟子を怒らなかった、などと答えている。教師は、自分がそういうふうにされたらどうか、と尋ねている。

・第3分節（20T～26 野田）

教師が、砂山の「柿話」のエピソードを高木と野田に発表させている。二人は資料を出して報告している。

・第4分節（27T～43 本田）

「柿話」への意見を野田に出させ、他の子どもたちにどう思うか、と聞いている。優しさのほうが生徒を反省させる、いい方向に導いている、自分で反省してほしいと考えた、人の気持ちを優先して考えている、平等に接している、といった評価する意見が多く出ている。

・第5分節（44T～67 高木）

教師は高木に同様の質問をする。高木は普通に接していると述べ、さらに説明を求められて、人と砂山のやさしさの基準が違う、と答えている。教師はさらに説明を求めている。

・第6分節（68T～79 高木）

教師は、砂山をどう考えたか、高木以外の子どもに尋ねている。相手の気持ちを考えている、といった発言が出た後、表向きだけ尊敬されていた、と高木が発言し、教師がその意味を確認している。高木は尊敬できる人は北京さん（映画の北京原人）と発言している。

・第7分節（80T～102T）

教師は高木以外の子どもに、砂山をどう考えたかを尋ねている。我慢していた、という意見の後、優しすぎてもダメと思う、という馬場の発言があり、その発言に関連する発言（怒ってもいい、生徒と一人の人間として考えてあげていた）が出ている。

・第8分節（103T～111T）

教師が3人の子どもにプリント（砂山について調べた感想）を読ませている。砂山は自分より他人を大切にしている、といった発言や、砂山の夢や生徒への願い、女性への教育への考えなどを知りたかったという発言が出ている。教師は、砂山の優しさや夢について、自分の考えをまとめるように指示している。

○授業の発言状況

全体を通して、教師の発言も多く、教師と子どもの発言回数比は約1対1である。教師は、子どもの発言の度ごとに出ている。最初から子どもたちの長い発言が多く出て、子どもたちは砂山の人柄や教育について考えたことを

十分に述べている。発言の多い子どももいる。高木は19回発言している。野田も9回発言しており、3単位以上の長い発言を4回している。

第1分節は前回の授業の後に書いた感想のプリントを4名が発表しているが、長い発言が多い。第2分節は、教師による発言の後、子どもから短い発言が出ている。その後、野田が「柿話」について3単位の発言をしている。第3分節は「柿話」のエピソードを野田と高木が発表しているが、長く発言をしているのは野田である。第4分節では、野田と高木の短い発言のあと、4名の子どもが初回発言をしている。野上は5単位、本田は3単位（2回）の発言をしている。第5分節は、教師と応答しながら、高木が12回発言している。そのほとんどが1単位の短い発言である。教師も11回発言している。この分節では、それ以外の発言は木村だけである。第6分節は、2名の初回発言がある。その後、高木が教師と応答して、3回発言している。第7分節では、相互に関連した発言が多く出ている。まず、小田、馬場が2回ずつ発言し、野田がそれらの発言に関連させて、6単位の長い発言をしている。その後、5名の初回発言がある。第8分節では、教師の指名で3人の子どもが発表している。本田の発言は4単位の長いものである。

このように教師の発言も多いが、子どもたちの発言も多く、しかも長いものとなっている。特に、最初の段階から長い発言がある。このことから、本授業の発言しやすい雰囲気が伺える。また、プリントの発表、エピソードの説明、教師と高木との応答、関連的・連続的な発言など、本授業は分節ごとに発言の特徴がみられた。さらに、野田は第2、第3、第7分節の発言など、本授業が内容的に深まる上で重要な発言を出している。

○言葉・概念の展開状況

最初の段階から子どもたちから重要な言葉がよく出ている。また、分節ごとに用いる言葉にかなり違いがある。子どもの発言の中には重要な言葉を多く用いているものがある。

第1分節では、4人の発言者全員が教育を用いている。その他に、怒る、尊敬、を2回、優しい、人間を1回ずつ用いている。このように、砂山の教育や人柄が出されている。第2分節の最初に、教師が、怒る、尊敬、優しい、

を用いている。これは第1分節の子どもたちの発表を整理したものであるが、第1分節で多く用いられていた教育がない点が注目される。ここで、教師は砂山の人物像に追究の焦点を絞ったといえる。それに対して、野田は生徒、怒る、反省を用いて、砂山の塾生への対応の特徴について述べている。第3分節で野田は怒る、生徒を用いている。高木は反省を用いている。第4分節で、野田は一単位の短い発言の中に、怒る、優しい、生徒、反省、といった多くの言葉を用いている。また、他の子どもたちは、怒るを3回、優しい、生徒を2回、反省、性格を1回用いている。このように、この場面では砂山の性格が、怒る（怒らない）という面を中心に追究されている。一方、教師は優しいを1回用いている。第5分節では、高木が優しいを4回、さらに北京（原人）を5回用いている。教師は優しいを3回、北京（原人）を2回用いている。木村も北京（原人）を1回用いている。このようにかなり限定された内容となっている。第6分節では、まず、2名の子どもが生徒と怒るを出している。さらに、高木が尊敬、優しいを2回、怒る、北京（原人）を1回用いて発言している。教師も尊敬を1回用いている。この尊敬は第1分節で出たが、それ以後は用いられてなかった言葉である。第7分節では、子どもから、怒るが7回用いられており、このことが追究の焦点になっている。その他に、優しいが5回、生徒が3回、反省、人間が1回用いられている。教師は怒る、優しい、反省を用いている。第8分節では、子どもから生徒、教育、夢が出ている。教師は最後の発言で、夢、教育、優しさ、生徒、を用いている。この教育は、第1分節で出て以来、ここまで用いられなかった言葉である。

全体的にみて、子どもたちからは怒る（怒らない）が多く出ていて、砂山の人柄をこの怒る（怒らない）をもとに追究しているといえる。その一方で、第1分節で出ていた教育や尊敬という言葉は、それ以外の分節では、あまり出ていない。高木が多く出した、北京（原人）も、他の子どもからほとんど用いられていない。教師は子どもの丁寧に発言に対応しているが、子どもが出した言葉をすぐ用いて、対応することはあまりない。しかし、第5分節や第6分節での高木の発言に対しては、その出した言葉をすぐに繰り返してい

る。これは本実践で高木を抽出生に位置づけていたことや、高木の発言の意味・意図がやや不明確だったことによるといえよう。野田は 24 発言で、生徒と人間を用いて、砂山が塾生をどのように見ていたかを述べている。同様の言葉を高橋も用いているが、これらは重要な追究内容であると思われる。このように、本授業では社会的な問題追究よりも、砂山の人物像や指導の特徴が主に検討されているが、それも貴重だったといえる。そのことは、当時の人間の生き方や、現在の教育との比較といった、社会的な問題追究へと発展する可能性があるからである。

Ⅲ．まとめ

本稿ではこれらの三つの授業を取り上げて分析した。事例①では、列挙的な発言ではあったが、主要な話題に即して、多くの子どもたちが自分の予想を十分発言していた。教師も子どもの発言に、その都度丁寧に対応していた。ここで、教師は特に、水、土地、鉄といった言葉を返し用いて、その内実を明確にしようとしていた。そのあたりの教師の意図についてもう少し検討することが必要と思われる。事例②は、「中国で農村に読み書きのできない人がなぜふえてきたのか」について、一人っ子政策の課題や教育の不備など様々な観点から発言がされていた。また、都市でも読み書きのできない人がいるがなぜか、読み書きができないでも生きていくのに問題はないか、など多くの点が議論されていた。このように、子たちは質問―応答、議論を積極的に行なって、追究を深めていた。事例③は加倉井砂山の人柄や指導方針について、活発な意見の交換がなされていた。教師は、子どもに意見を出させ、その内容を丁寧に確認していた。授業では砂山の性格が、怒る（怒らない）という面を中心に追究されていたが、子どもたちにとって、砂山が怒らないで弟子を指導したことは非常に興味深いことであったようである。また、子どもたちから、砂山は生徒を一人の人間としてみていた、との発言があるが、これも今の中学生が訴えたいことが素直に出ているように思われる。

今回、3 つの中学校の社会科授業を分析したが、どの授業でも子どもたちはのびのびと発言できていた。特に事例③では、子どもたちの個性やその主張したいことがよく見えた。このように、小学校に比べて、子どもがあまり発言しないといわれる中学校の授業でも、やり方によっては積極的な発言や議論が可能であることがわかった。また、最初の教師発言が 20 単位もの長いものがあることや、議論の内容が相当複雑になることなど、小学校の授業との違いや課題も徐々に見えてきた。今後、さらに中学校の社会科授業について取り上げ、検討を深めていく予定である。

［注］

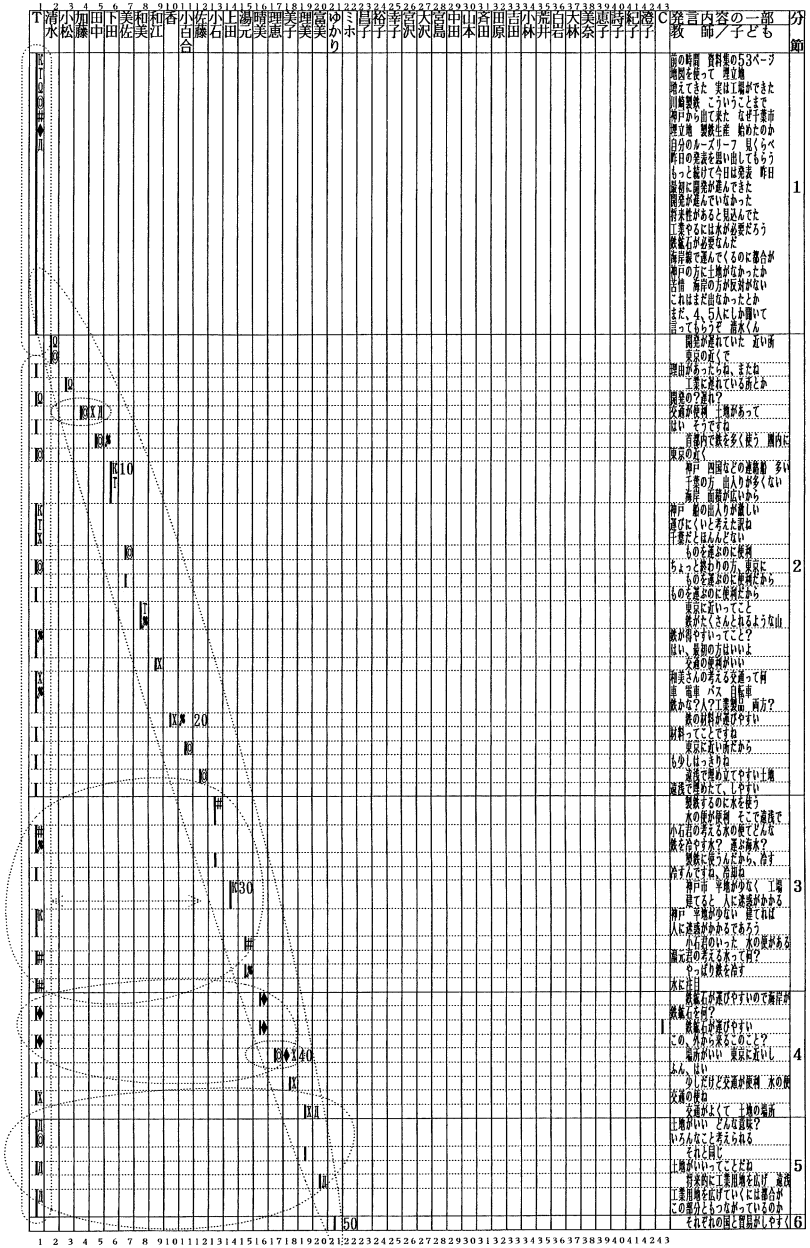
1）これらの一連の研究については、拙稿「授業における発言の様相―解釈　―小学校 1 年生の授業を事例に―」西南学院大学児童教育学論集第 27 巻第 2 号　2001 年 2 月、から、「授業における発言の様相―解釈　―小学校 6 年生の授業を事例に―」西南学院大学教育・福祉論集第 3 巻第 2 号　2004 年 2 月、にかけて報告している。

2）発言表は、西南女学院大学の中村亨教授が考案し、筆者や香川大学の田上哲助教授が、その改良や応用的開発を行っている。

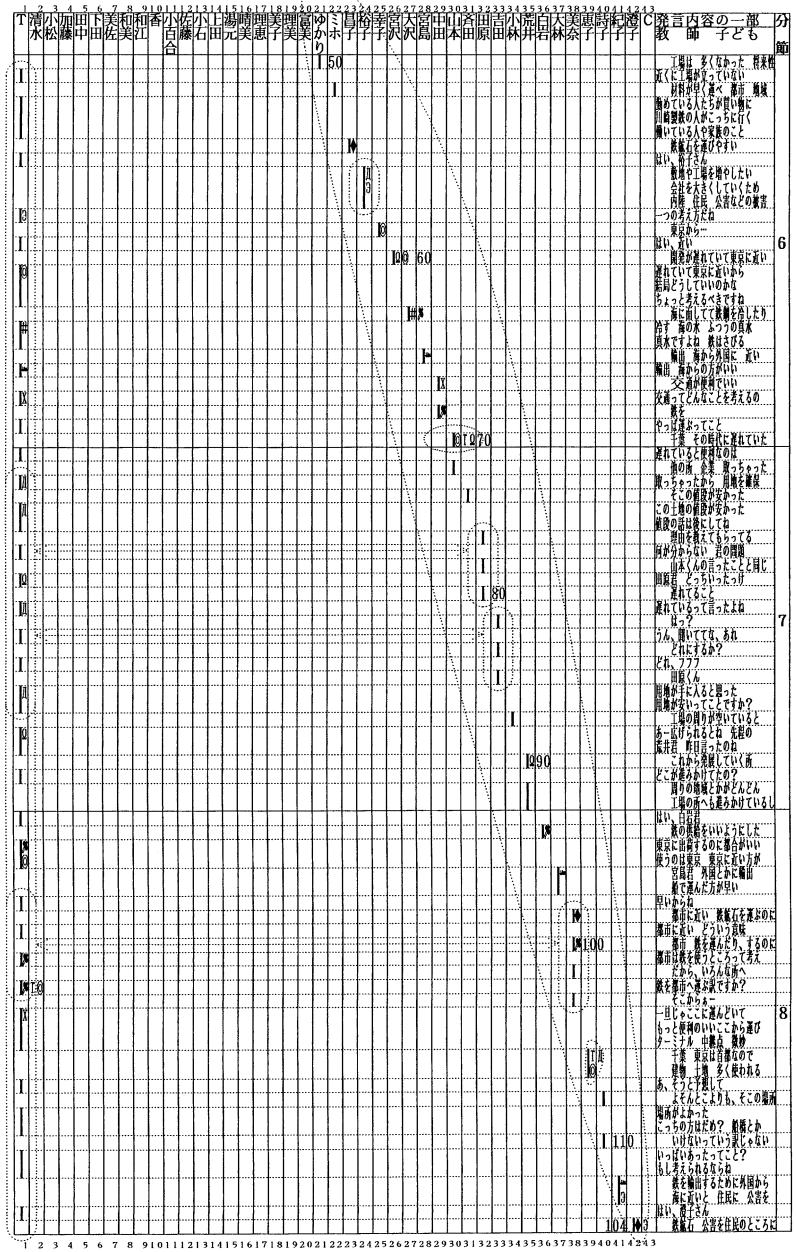
3）ちなみに筆者はこの提案授業の分科会に司会者として参加し、授業者の先生から細かく実践の状況などを伺うことができた。

西南学院大学文学部児童教育学科

長野県・長野市立Ｙ中学校１年生　Ｉ先生指導　社会科　1987年２月26日　「関東地方　－首都東京」①



長野県・長野市立Ｙ中学校１年生　Ｉ先生指導　社会科　1987年２月26日　「関東地方　－首都東京」②

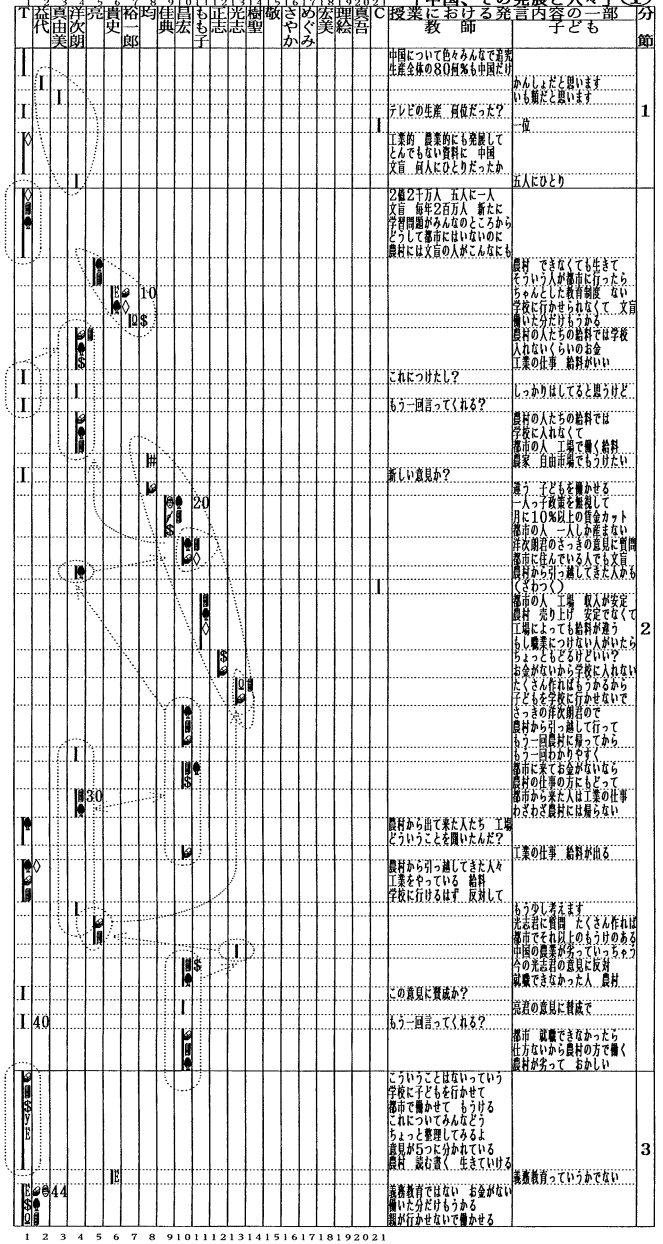


長野県・長野市立Y中学校１年生　Ｉ先生指導　社会科　1987年２月26日　「関東地方　－首都東京」③

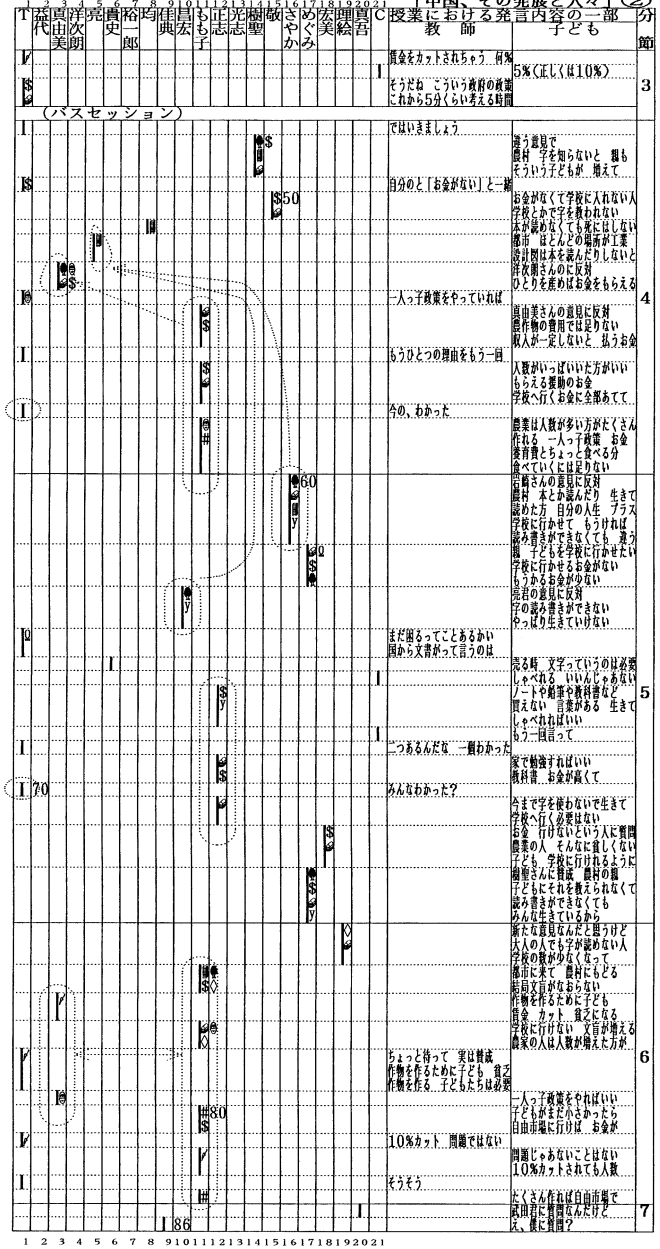
＊本授業で出された主要な言葉・概念とその記号。

K……神戸
T……千葉
Ω……開発
◎……東京（首都）
#……水
♦……鉄鉱石
Д……土地（用地・敷地）
X……交通
✂……鉄
Э……公害
⛴……輸出

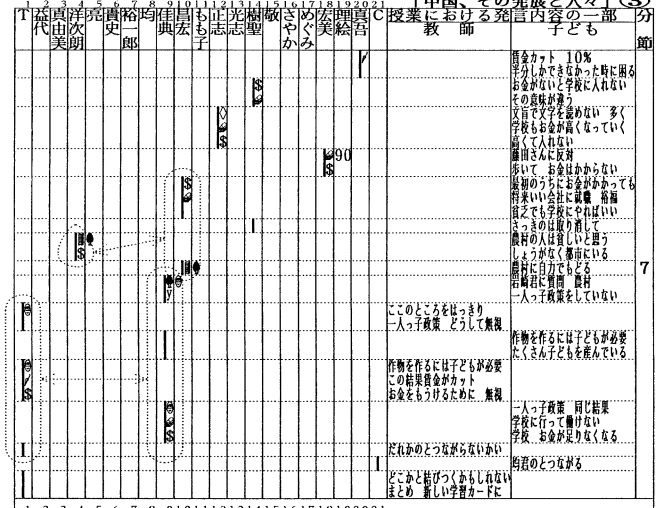
長野県・南安曇郡M中学校１年生　C先生指導　社会科　1992年11月2日
「中国、その発展と人々」①



長野県・南安曇郡M中学校１年生　C先生指導　社会科　1992年11月2日
「中国、その発展と人々」②



長野県・南安曇郡M中学校１年生　C先生指導　社会科　1992年11月2日
「中国、その発展と人々」③



＊本授業で出された主要な言葉・概念と記号

◇……読み書きのできない人（原授業記録では文盲）

▤……都市

●……農村

卍……教育（制度）・義務教育

▱……学校

Ω……生産責任制

$……お金

＃……自由市場

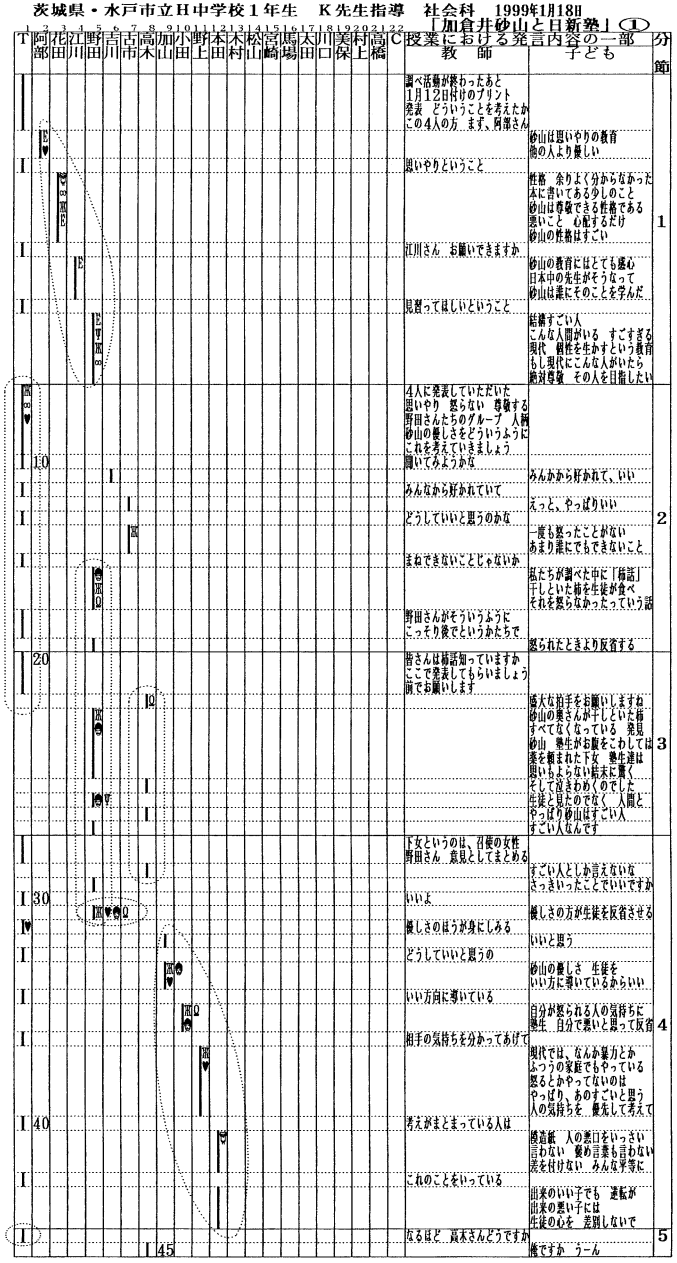
㊒……一人っ子政策

〆……賃金カット（%カット）

y……読み書き（読む、書く）

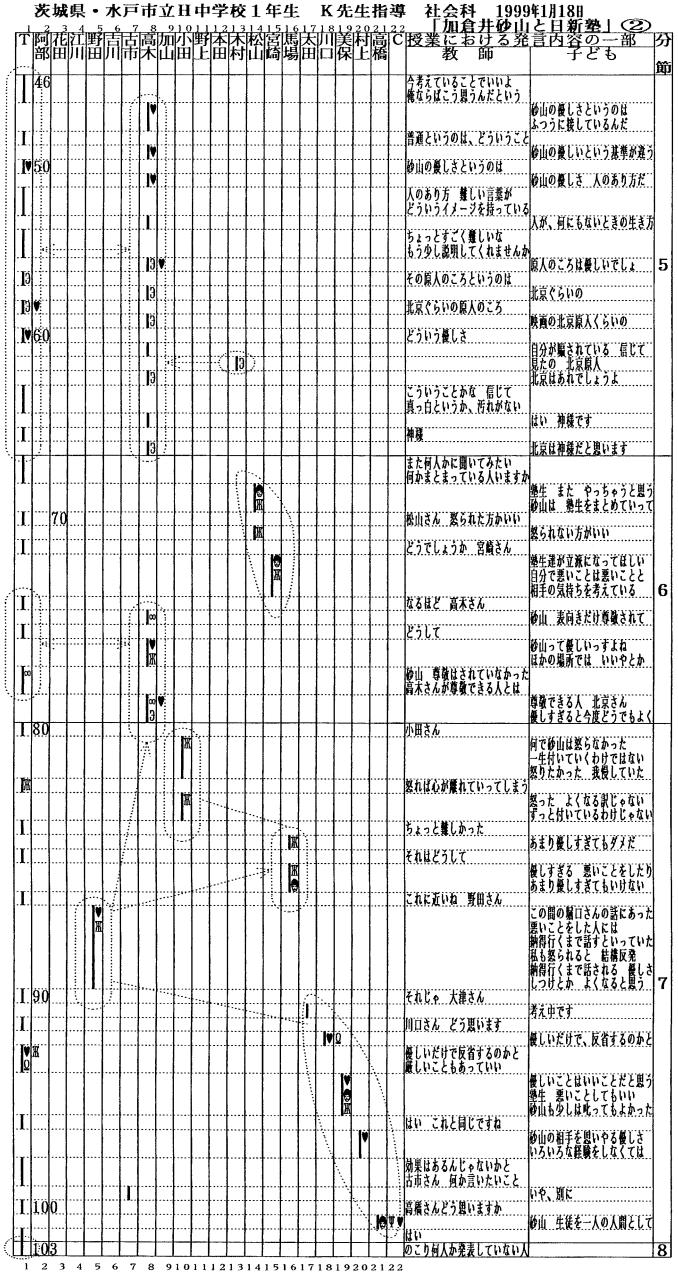
茨城県・水戸市立H中学校１年生　K先生指導　社会科　1999年1月18日

「加倉井砂山と日新塾」①



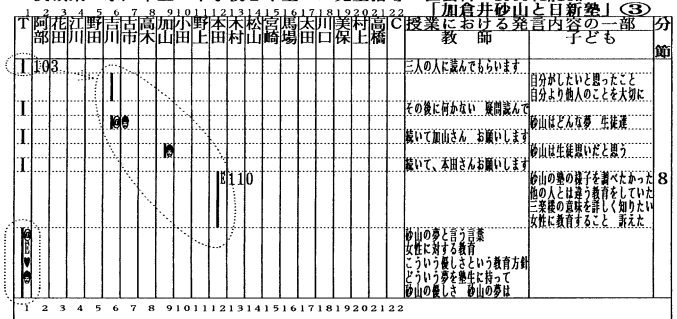
茨城県・水戸市立H中学校１年生　K先生指導　社会科　1999年1月18日

「加倉井砂山と日新塾」②



茨城県・水戸市立H中学校１年生　K先生指導　社会科　1999年1月18日

「加倉井砂山と日新塾」③



＊本授業で出された主要な言葉・概念とその記号

Ė……教育

♥……優し（い・く・さ）

♈……性格

∞……尊敬

Ж……怒（らない・る）

Ψ……人間

☻……生徒・塾生

Ω……反省

Ɔ……北京（原人）・原人

@……夢